様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２４１９

研究課題名（和文）人新世におけるツーリズムとその課題－脱炭素社会に向けたツーリズムのあり方

研究課題名（英文）Tourism in the Anthropocene: Transition and Challenges of Tourism towards Decarbonized Societies

研究代表者
片瀬　葉香（Katase, Youka）

九州産業大学・地域共創学部・准教授

研究者番号：４０５１３２６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，人新世（Anthropocene）とは何かについて，3つの時代に区分してその歴史的変遷を概観し，議論の発端となったクルッツェン（P. J. Crutzen）の「人新世の本質」を検討した。その結果，人新世とは，産業革命以後の産業化社会がもたらした地球システムの改変であり，1980年代以降，急激に発展・拡大したツーリズムがその一端を担っていることが明らかになった。結論として，人新世第3ステージに入った今日，人新世の倫理的な問いとして，地球をケアする地球愛が求められていることを指摘し，地球にやさしいツーリズム，ソフトツーリズム推進の必要性を具体的に提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
人新世という時代に私たちはいかに生活するのか。地球を改変する営力となったツーリズムは人新世時代にどう向き合うべきか。世界のツーリズム研究者は，何を問題とし，それに対してどのような指針を導き出しているのかを探り出し，人新世第3ステージにふさわしい3つのツーリズムを提案した点に学術的な意義がある。そして，これらの考えに基づき，地球にやさしいツーリズム，ソフトツーリズムを通じて，地球の生活維持システムを保護管理し，将来及び現在世代にとって，倫理的で公正な新しい社会の構築に向けた改革推進の必要性を指摘した点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study explores what the Anthropocene is, particularly from a perspective of tourism. It overviews its development by identifying a subdivision into three stages, and examines its essence throughout the analysis of the words of P. J. Crutzen, who first proposed that concept. It is suggested that the Anthropocene represents the transformations of the Earth System brought by industrialized societies after the Industrial Revolution, and especially since the 1980s tourism has contributed to such changes as it has rapidly developed and extended. In conclusion, the study points out that the ethical question to be asked regarding the Anthropocene is how we can care for the Earth, what “geo-philia” is, and in so doing, Earth-friendly tourism or soft tourism should be promoted.

研究分野：観光学

キーワード：人新世　ツーリズム　地球システム　地球温暖化　脱炭素社会　ソフトツーリズム　持続可能なツーリズム　ヨーロッパアルプス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）「人新世（Anthropocene）」という用語が，自然科学のみならず人文・社会科学の分野において，欧米を中心として広まっている。これは，クルッツェン（P. J. Crutzen）が 2000 年に，産業革命以後の人間活動によって地球環境が改変された結果，地球上に「人間の痕跡」が刻まれたことを根拠に，「人新世」という概念を提唱したことから始まった。

（2）ステフェン（W. Steffen）らは 2007 年に人新世を 3 つのステージに区分した。第 1 ステージ（1800 年頃～1945 年）は，産業革命以後，化石燃料が動力として利用され産業化が進展した「産業の時代」。第 2 ステージ（1945 年～2015 年頃）は，第二次世界大戦後，産業のグローバル化により化石燃料の消費が大幅に増加した結果，地球環境が悪化し，人間の生命を脅かすようになった「大加速の時代」。そして，2015 年頃以降の第 3 ステージは，このままの状態が続けば人間の生命が危機的状態になるという「地球の限界（planetary boundaries）」を認識し，人間活動によって地球環境が悪化したことを反省し，脱炭素社会の構築を思索する「地球システムの管理者の時代」である。

（3）ツーリズムは，気候，自然資源，文化遺産などをベースとして発展してきたが，同時に，地球環境に負荷を与えている活動の一つとして認識されている（Gössling, 2000）。
また，人新世への関心が高まる中，人新世をツーリズムの観点から検討しようという試みが開始されている（Gren & Huijbens 2012）。さらに，脱炭素化の時代に相応しいツーリズムを実践している先駆的な取り組み（アルプスのソフトツーリズム）に関する研究も行われている。

２．研究の目的

本研究の目的は，人新世に関して概観し，人新世の各ステージにおいてツーリズムがいかに地球環境に負荷を与えてきたか，その負荷をいかに軽減すべきか，という課題を考察し，脱炭素社会におけるツーリズムのあり方を検討することである。

３．研究の方法

（1）ツーリズムと脱炭素もしくは環境問題について，その概念や実態について，文献（主に欧文）調査に基づいて，主要な研究者の論点などを整理する。そして，ミュラー（M. Müller）からのインタビューに応じて，クルッツェン自身が語った人新世の本質を明らかにする。

（2）ツーリズムと脱炭素もしくは環境問題に関して北欧諸国とヨーロッパアルプス地域において現地調査を実施する予定であったが，COVID-19 の影響により海外調査が困難となり中止した。

４．研究成果

（1）【2020 年度】①雑誌論文･学会発表：片瀬葉香（2020）「人新世におけるツーリズムの課題に関する一考察」（第 35 回日本観光研究学会 全国大会 学術論文集, 257-260）。ツーリズムと気候変

動との関係性に着目して，人新世第 3 ステージの今，地球環境に負荷をかけないツーリズムはどうあるべきかという問題提起をし，ツーリズムが取り組むべき課題を明らかにした。②雑誌論文：横山秀司（2020）「人新世のツーリズムと COVID-19―ヨーロッパアルプスを事例に」（第 35 回日本観光研究学会 全国大会 学術論文集, 249-252）。**2020 年に発生し，世界のツーリズムに大きな打撃を与えた** COVID-19 **収束後のツーリズムはいかにあるべきかという問いを，人新世を背景にアルプスを事例として考察した。結論として，パンデミックは人新世第** 2 **ステージの「大加速時代」を象徴する大規模化によるものであり，地球の気候変動など人類の生活が脅かされている現状を鑑みれば，収束後は，化石燃料を大量に消費したこれまでのツーリズムから脱却し，脱炭素化の時代に相応しいツーリズムのあり方，特にソフトツーリズムを実践すべきことを主張した。**

（2）**【2021 年度】**①雑誌論文･学会発表：横山秀司･片瀬葉香（2021）「COVID-19 パンデミック後のツーリズムと人新世」（第 36 回日本観光研究学会 全国大会 学術論文集, 285-288）。**2020 年の** COVID-19 **パンデミックを人新世第** 3 **ステージの転換と捉え，パンデミック後のツーリズムのあり方を，約** 40 **編の論文を参考にまとめ，ソフトツーリズムやスローツーリズムなど，地球システムへの負荷を抑えたツーリズムが相応しいという結論に至った。**②雑誌論文：片瀬葉香（2019）「グレンとハウベンスの『ツーリズムと人新世』について」（地域共創学会誌, 7, 53-69）。**人新世，すなわち，「人類の時代」という観点からツーリズムを捉える試みに着手したグレン（**M. Gren**）とハウベンス（**E. H. Huijbens**）の論究を軸として，人新世におけるツーリズムとは何か，ツーリズムは地球システムにいかに関わるべきか，という問いへの取り組みの糸口を明らかにした。**

（3）**【2022 年度】**①雑誌論文･学会発表：横山秀司･片瀬葉香（2022）「クルッツェンの人新世とサステナブルツーリズム」（第 37 回日本観光研究学会 全国大会 学術論文集, 21-26）。**2000 年にクルッツェンは完新世が終わり今や人新世，すなわち人類の時代であると唱えた。その後，自然科学だけではなく人文・社会科学の分野においても人新世をテーマとした多くの論文や書籍が公にされている。しかし，クルッツェンは人新世に関し，勝手に使用できるファッショナブルな概念ではなく，軽々しく使用してはならないと戒めている。そこで，クルッツェンの「人新世の本質」とは何か，人新世におけるサステナブルは何を意味するのかを考察し，それらを踏まえてサステナブルツーリズムのあり方を検討した。**②雑誌論文：片瀬葉香（2022）「人新世におけるツーリズムの再検討」（地域共創学会誌, 9, 1-13）。**クルッツェンが今世紀初頭に人新世を提唱した意図は何かという問いを，「地球規模の変化」及び「地球システム」との関係において検討し，人新世の各ステージにおいて人間活動はいかに地球環境に負荷を与えてきたか，その負荷をいかに軽減すべきかという課題に，ツーリズムは今後どう関わればいいのかについて考察した。**③雑誌論文（査読あり）：横山秀司（2022）「ソフトツーリズムの再考―人新世時代と COIVD-19 を背景として」（観光研究, 34（1）, 51－58）。**1970 年代からのマスツーリズムの発展に対して，もう一つのツーリズムとして，環境に負荷を与えることの少ないソフトツーリズムが生まれた背景とその今日**

的意義を再考した。1980 年代にアルプス地域を中心にソフトツーリズムが実践されたが，1990 年代からは持続可能なツーリズムの広がりによって，その議論は下火になった。しかし，2000 年代に「アルプスの真珠」のようにソフトツーリズム指向する自治体組織が現れ，その議論が復活した。2020 年に COVID-19 パンデミックの発生，地球温暖化の進行など，その対策が急務となった。このような状況下で，環境に負荷を与えることの少ないツーリズムが提案されているが，それはソフトツーリズムと通底することを明らかにした。④雑誌論文（査読あり）：横山秀司（2022）「人新世時代のヨーロッパアルプスとツーリズム」（日本山岳文化学会論集, 19, 49-57）。ツーリズムが人新世の 3 つのステージにおいてどのように変遷してきたのか，今後，ツーリズムはどうあるべきかを，ヨーロッパアルプスに焦点を当てて明らかにした。地球温暖化の進行に伴って生じているツーリズムへの影響を明らかにし，今後のアルプスツーリズムについて考察した。アルプスでは自然資源と景観をベースとして発展してきたが，ツーリズム自からが，それらを破壊している。特にスキー場では地球温暖化に対応して人工降雪機の設置数が増加しているが，生態系や景観の破壊，エネルギー消費の問題に繋がっている。今後は，環境に負荷を与えることの少ないソフトツーリズムの重要性が高まることを指摘した。

（4）【2023 年度】①雑誌論文･学会発表：片瀬葉香･横山秀司（2023）「ツーリズムと気候変動―これからのツーリズムに向けて」（第 38 回日本観光研究学会 全国大会 学術論文集, 355-360）。ツーリズムは避暑地・避寒地，スキーリゾート，ビーチリゾートなど，気候条件に適したエリアで発展してきた。一方，1980 年代以降，ツーリズムのグローバル化の進展に伴う環境の変化に対して，ツーリズム産業は，直接的，間接的な対応を余儀なくされた。1990 年代には，化石燃料の消費に伴って排出される温室効果ガスと気候変動の関係が認識されるようになり，ツーリズム―その大部分はツーリストの輸送―に起因する CO_2 排出量は，世界全体の 5%（2005 年）を占めていることが世界観光機関によって提示された。こうした背景を踏まえ，ツーリズムと気候との関係を明らかにし，脱炭素の取り組みに着目して，持続可能な未来のために，ツーリズム研究者は，ツーリズムが地球温暖化に影響を与えているという認識を共有し，この課題の解決に向けた行動を起こすことが求められているとの結論に至った。②学会発表：横山秀司（2023）「気候変動によるアルプス観光への影響」（第 20 回日本山岳文化学会大会）。1980 年代からヨーロッパアルプスでは，気候変動によるツーリズムへの影響が認識されるようになり，スキー場では雪不足に対処するため，水と電力を大量消費する人工降雪機の設置が始まった。降雪機に使用する水を得るための貯水池が稜線上など多くの場所で設置されたが，生態系や景観の問題を発生させた。一方，脱炭素化の動きがアルプスツーリズムにも及んできた。スキー場への自動車での来訪，人工降雪機やロープウェーなどのエネルギー消費と CO_2 排出量の増大を問題視し，スキーをためらう人たちが現れ，2022 年にオーストリアで「スキー恥 Skischam」という言葉が生まれた。このような人たちの受け皿の一つは，アルパイン協会が支援している「登山者村」であり，ソフトツーリズムを実践していることを報告した。③図書：片瀬葉香（編著）･横山秀司（著）（2024）『人新世とツーリズム―地球とツーリズムの未来を考える』（九州大学出版会）。研究成果（令

和 2〜4 年度/科研）をまとめ，「人新世という時代に私たちはいかに生活し，地球システムをいかに維持していくべきか」，「地球を改変する営力となったツーリズムは人新世時代にどう向き合うべきか」という問いに対して，第 1 部「人新世という時代」において，人新世議論の発端となったクルッツェン（P. J. Crutzen）らによる報告を検討し，産業革命以後 3 つのステージに区分される人新世時代の歴史的変遷を概観した。そして，ミュラー（M. Müller）によるインタビューに応じて，クルッツェン自身が語った人新世の本質を明らかにした。第 2 部「人新世時代のツーリズム」では，ツーリズムは，気候，自然資源，文化遺産などをベースとして発展してきたが，同時に，それらを破壊する行為でもあったことを指摘した。まず，1970 年代からのツーリズムによる地球システムへの負の影響を指摘した。次いで，ツーリズムが気候変動と地球温暖化に影響を及ぼしてきたことを明らかにした。そして，今や地球を改変する営力となったツーリズムは，地球システムにいかに関わるべきかについて検討した。第 3 部「人新世と持続可能なツーリズム」では，ヨーロッパアルプスにおけるツーリズムの変遷と人新世時代の関係を検証し，ツーリズムの現状を明らかにした。次いで，1970 年代からのマスツーリズムの発展に対して，もう一つのツーリズムとして，環境に負荷を与えることの少ないソフトツーリズムが生まれた背景とその今日的意義を考察した上で，持続可能なツーリズムの可能性を明らかにした。今後の課題として，第 3 ステージの「地球システムの管理者の時代」に転換したことを認識し，地球をケアする地球愛とは何かという観点から，将来世代のみならず，現在を生きる人びとにとって，倫理的で公正な新しい社会の改革をいかに推進すればいいのかを検討したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 片瀬葉香	４．巻 なし
２．論文標題 人新世におけるツーリズムの課題に関する一考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第35回日本観光研究学会全国大会学術論文集	６．最初と最後の頁 257-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 横山秀司	４．巻 なし
２．論文標題 人新世のツーリズムとCOVID-19－ヨーロッパアルプスを事例に－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第35回日本観光研究学会全国大会学術論文集	６．最初と最後の頁 249-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片瀬葉香	４．巻 7
２．論文標題 グレンとハウベンスの「ツーリズムと人新世」について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 地域共創学会誌	６．最初と最後の頁 53-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 横山秀司・片瀬葉香	４．巻 なし
２．論文標題 COVID-19パンデミック後のツーリズムと人新世	５．発行年 2021年
３．雑誌名 第36回日本観光研究学会全国大会論文集	６．最初と最後の頁 285-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 片瀬葉香	4．巻 9
2．論文標題 人新世におけるツーリズムの再検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 地域共創学会誌	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 横山秀司・片瀬葉香	4．巻 第37回
2．論文標題 クルッツェンの人新世とサステナブルツーリズム	5．発行年 2022年
3．雑誌名 第37回観光研究学会全国大会学術論文集	6．最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横山秀司	4．巻 19
2．論文標題 人新世時代のヨーロッパアルプスとツーリズム	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本山岳文化学会論集	6．最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横山秀司	4．巻 34(1)
2．論文標題 ソフトツーリズムの再考－人新世時代とCOIVD-19を背景として－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 観光研究	6．最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片瀬葉香・横山秀司	４．巻 なし
２．論文標題 ツーリズムと気候変動－これからのツーリズムに向けて－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 第38回日本観光研究学会全国大会学術論文集	６．最初と最後の頁 355-360
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 横山秀司
２．発表標題 人新世のツーリズムとCOVID-19－ヨーロッパアルプスを事例に－
３．学会等名 第 35回 日本観光研究学会全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 片瀬葉香
２．発表標題 人新世におけるツーリズムの課題に関する一考察
３．学会等名 第35回日本観光研究学会全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 横山秀司
２．発表標題 COVID-19パンデミック後のツーリズムと人新世
３．学会等名 第36回日本観光研究学会全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 横山秀司
２．発表標題 クルッツェンの人新世とサステナブルツーリズム
３．学会等名 第37回日本観光研究学会全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 横山秀司
２．発表標題 気候変動によるアルプス観光への影響
３．学会等名 第20回日本山岳文化学会大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 片瀬葉香
２．発表標題 ツーリズムと気候変動－これからのツーリズムに向けて－
３．学会等名 第38回日本観光研究学会全国大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 片瀬葉香（編著）・横山秀司（著）	４．発行年 2024年
２．出版社 九州大学出版会	５．総ページ数 178
３．書名 人新世とツーリズム－地球とツーリズムの未来を考える－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関